ラジオ放送

＜平成26年1月～3月放送分＞

ON AIR

金光教の声

No.406

もくじ ～*contents*

＜先生のおはなし＞

☞ 金光教の教会の先生のお話です。

●年頭放送　**賜った命**
金光教教務総長　岡成敏正　*page 1*

●**地域の人たちと共に**
金光教富山教会　三浦義雄　*page 5*

●**梅雨の晴れ間**
金光教湖北教会　井上宗一　*page 9*

●**人は恋を失って育つ**
金光教麻布教会　松本信吉　*page 14*

●**大往生の三原則**
金光教今池教会　浅野　弓　*page 18*

●**落ちても受かっても**
金光教香住教会　荒垣慶子　*page 22*

●**心で人を殺さないように**
金光教北九州八幡教会　野中正幸　*page 27*

●**祈りの中の出来事だった**
金光教羽ノ浦教会　岩崎道範　*page 31*

●**お母さんが怖い**
金光教入田教会　瀬戸信吉　*page 35*

＜こころの散歩道＞

☞ 軽い音楽に乗せたちょっといい話

●**第１回　五十肩になりまして**　*page 39*

●**第２回　笑うこと**　*page 43*

●**第３回　ミツバチさん**　*page 47*

●**第４回　銀座のお漬け物**　*page 51*

《年頭放送》

「天地とつながる生き方」

金光教教務総長　岡成敏正

皆様、明けましておめでとうございます。平成二十六年の新年を、共々にお迎えすることが出来ましたことを、心よりお慶び申し上げます。

また、私どもにとりまして、本年は、金光教の教祖金光大神様がお生まれになって二百年という記念の年に当たり、一層にありがたいことと御礼を申しております。

さて、私どもは、その金光大神様のみ教えを頂いて、様々なおかげを頂いておりますが、そうした教えを伝えられた人の中に、山本定次郎という方がいます。

定次郎師は明治九年、二十二歳の時に、初めて金光大神様のもとへ参拝されました。その時、定次郎師がまだ何も話さないのに、金光大神様から、「人間は、どうして生まれ、どうして生きているかということを知らねばなりませんなあ」と話し掛けられたのです。

定次郎師は、最初、「何を言おうとされているのだろうか」と思いましたが、お話を聞くにつれ、次第に納得させられ、最後には、「その時の天地のお恵みについてのみ教えは、一言一言が胸に突き刺さるようにこたえて、大変に感激した」と、振り返っておられます。

「人間は、どうして生まれ、どうして生きているのか」

私は、小さい頃から、金光教の教師であった

父と母から、「あんたはねえ、おかげを頂いて生まれてきたんぞ」と言われてきました。

私は大変な難産で生まれ、生まれても、「おぎゃあ！」と泣かなかったそうです。泣かないということは、息をしません。すぐにお医者さんを呼、んで手を尽くしてもらいました。お医者さんは「もう駄目だ」と言いましたが、それでも両親は必死で神様にお願いをしてくれ、その間、お手伝いに来ていた方が、諦めずに私の体を温めていると、「おぎゃあ！」と泣き出したそうです。

両親はこの話をもとに、「おまえは、そうやって命を頂いたんじゃ。おかげを頂いて生まれてきたんぞ」と、繰り返し言うのです。しかし、そう言われても、私には、自分が生まれた時のことは分かりません。ところが、不思議なもので、自分の子どもを授かってみて、両親の言葉に込められた意味や思いの深さが分かるようになりました。

私は、現在、二十八歳の長女を筆頭に、長男、次女と三人の子どもを授かっています。その子どもたちが生まれてくる時にはいろいろなことがあり、命が誕生するということは大変なことだと実感しました。やはり、人間の力を超えた大きな働きを頂いて生まれるのだと思っております。それで私も、子ども一人ひとりに、事あるごとに、「あんたは、おかげを頂いて生まれてきたんぞ」と話さずにはおられないのです。

ある時、私が、末の娘に、生まれてきた時のことを話すと、娘から、「おかげを頂いたのは、

お父さんでしょ！」と切り返されました。考えてみると、本当にそうです。「我が子がおかげを頂いて生まれてきた」と実感させられたのは、親にならせてもらえた私自身であります。そこで、改めて親の心を分からせられたのであります。

ところで、信心をしている人だけが、おかげを頂いて生まれてきたのかというと、そうではありません。金光大神様は、「この天地の間に住む全ての人が皆、神様のおかげの中で生まれてくる」と、教えて下さっています。また、「天地の間に住む人間はみな神の愛しい子どもである」と教えられております。

私は、このような教えを聞かせてもらいながら育ちました。そして今、この世界中のすべての命が、神様のお働きである天地の恵みを頂いて生まれ、育まれていると、思わせられております。

だからといって、「そのことを知らなければ、生きていけない」とは言いません。しかし、このことが腹入れ出来れば、たとえ、人生の困難に出遭っても、それを乗り越えていくための生きる力が生まれ、そこに新たな世界が開かれてくると思うのであります。

私たちは、良い人生、すばらしい人生を送りたいと願いながら、喜怒哀楽の人生を歩んでいますが、その命は、天地から賜った命であります。しかも、その命が、毎朝、目を覚ますことが出来て初めて、嬉しいことや哀しいことの一日が始まるのです。このことを、金光教の前教

主・金光鑑太郎様は、お歌に詠んでおられます。

「喜怒哀楽先にはあらず賜びしいのちありてめざめてのちのことなり」

私たちは喜怒哀楽の方に心をとらわれがちですが、実は、喜怒哀楽より先に、まず、賜った尊い命があるのだということを、このお歌から教えて頂きました。つまり、朝、目覚めたら、「目覚めさせて頂きました。ありがとうございます」と神様にお礼を申す。そして、起こってくる全てのことにお礼を申しながら生活をする。そのお礼の積み重ねによって、豊かな人生が開けてくるのだということであります。

「喜怒哀楽先にはあらず賜びしいのちありてめざめてのちのことなり」

お互いは天地のお働きを頂いて生まれ、何年、何十年と、この天地のお働きの中で目覚めさせて頂いております。そこを大切に受け止め、朝、目覚めたことを当たり前のこととするのではなく、お礼を申す。その日々を重ねながら、共々に、尊い一年にさせて頂きたいと願っております。

「地域の人たちと共に」

金光教富山教会　三浦義雄

私たち家族が地元に帰り、八カ月ほど経った平成十二年の秋、近所の方が訪ねて来ました。「来年から、町内会の副会長をしてもらえませんか」と頼まれました。地元とはいえ、私の奉仕する教会がこの地に移転して、まだ十数年。その間、遠く離れた地で仕事をしていた私には、顔見知りの人はほとんどいないのです。

「新参者で、何も分からないのですが…」

「大丈夫ですよ。何とか受けてもらえませんか？」

私は、不安はあったものの、神様が、町内の方々と顔見知りになれる機会を与えて下さったんだと受け止め、「はい。分かりました」と返事しました。

その方は、ほっとした顔で、「ありがとう。助かります」とお礼を言い、帰って行かれました。

年末に新しい役員が集まり、来年度の行事や運営について話し合いました。その後、お酒を酌み交わしながら、会長から、「何年も会長をしているので、そろそろ新しい人に代わりたい。でも、受けてくれる人がいない。それに、色々と声を掛けても町内行事に協力してくれる人が少ない」など、思い通りにならない現状を聞かせてもらいました。

地域の人間関係も薄れてきている今日です。予想していたとはいえ、「町内のご用、大変そ

うだなあ」と、少し気が重くなりました。しかし、今さら辞退するわけにもいきません。

「頼まれたことはきちんとさせてもらおう。現状がどうあれ、愚痴・不足を持たないように、人に言わないようにさせてもらおう」。そんな心構えで臨むことにしました。

やがて五年が過ぎ、次の年からようやく、町内会を構成する班から、順番に会長を選ぶことが決まりました。私はいつの間にか、町内の方々と自然にあいさつを交わし合うほどになっていました。

輪番制になって二人目の町内会長は、それまで、ほとんど顔を合わせたことのない下条さんという方でした。定年退職後も仕事をされ多忙な中、真面目に会長の務めを果たされました。

特に熱心だったのは、夜回りの実施です。それまで年に数回、適当に巡回して済ませていた防犯・防火パトロールを、定期的に、きちんと継続していきたい、というのです。

私や他の役員は当初、「そこまでしなくても。これまで通りでいいんじゃないか」と、夜回りには消極的でした。しかし、何度もそのことを取り上げる熱心さに動かされ、平成二十一年十一月から、とりあえず月二回、役員と班長全員が、二手に分かれて、町内の夜回りをすることになりました。とはいうものの、一月から三月までは雪が積もるので夜回りはしないという、弱気なスタートです。

夜八時、めいめいに拍子木や振り鐘、懐中電灯などを持ち、蛍光色のジャンパーを着て、公

民館を出発しました。所要時間は約三十分。月に二回ですから、防犯・防火上の実際的な効果がほとんどないのを、口には出さないものの、みんな分かった上のことでした。

冬の休止期間が終わり、四月から、夜回りが再開されました。

その日、私は振り鐘を持ち、「チリン、チリン」と鳴らしながら、他のメンバーと歩いていました。小さな踏切をわたり、農業用水が脇を流れている細い道を歩いて、曲がり角に来ました。新しく班長になった方の家があります。

「見たことのない車が止まってますね」

「ああそれ。娘が孫と帰って来ていてね」

話しながら角を曲がると、まだ寒いのに窓が開いて、「おじいちゃん。がんばって」と、お孫さんから声が掛かりました。

私は、お孫さんに、「おじいちゃんは、みんなのために頑張っているんだよ。素晴らしいおじいちゃんだね」と伝えるかのように、振り鐘を、「チリン、チリン。チリン、チリン」と大きく鳴らし、可愛らしい励ましに応えました。

すると、これまでとは違う思いが湧いてきたのです。これまでは、「してもしなくても、変わらないのに」と思いながら、嫌々ではありませんが、役員の義務として、というような夜回りでした。

ところが、お孫さんの声を聞いて、大きく振り鐘を鳴らした後、「町内の皆様が、どうぞ、平和で幸せに暮らして下さいますように」と祈るような思いが湧いてきたのでした。春先とは

いえ、道路脇にはところどころ雪が残っています。でも、お孫さんの声と祈りで、心がポカポカと温かくなってきました。

前よりも短く感じられた夜回りを終え、私たちは公民館に戻って来ました。昨年から一緒に回っている方が、「夜回り、結構楽しいもんだね」と言われました。私は、「そうですね。いいことですよね」と返事をしました。

金光教祖は、「世界中が神様の広前である」と教えておられます。教会の広前では、「世界中の人が平和で幸せな暮らしが出来ますように」と、日々お祈りをしています。そして、夜回りで歩く道もまた、地域の方々の平和と幸せを祈る神様の広前なのだと、改めて思わされたのでした。

夜回りの実施に力を尽くされた下条さんは、会長の任期を終えて二年後、がんで亡くなられました。私は夜回りの時、下条さんの家の前で、「ありがとうございます」と、お礼の気持ちを込めて、「チリン、チリン。チリン、チリン」と振り鐘を鳴らし、通り過ぎて行きます。

「梅雨の晴れ間」

金光教湖北教会　井上宗一

数年前の出来事で、当時十七歳の秋子さんという女の子のお話です。彼女は、福祉関係の学校へ通っていました。

ちょうど梅雨の季節に入ったころ、福祉施設での三週間の実習がありました。実習初日のこと、秋子さんは、担当して下さる職員の方にごあいさつをし、「何をしたらいいですか」と尋ねました。

実習生は、たとえどんなに必要なことと分かっていても、一旦職員に尋ね、その指示によって動かなければならないと固く約束事が決められています。その指示を仰いだのでした。

ところが、秋子さんの問いかけに対して、「どいて、邪魔！」と言われてしまったのでした。

お邪魔にだけはならないようにと気にしていただけに、この一言にショックを受け、その日の実習を何とか終えて家に帰ると、今にも泣き出しそうな顔でお母さんに言いました。

「明日から、行きたくない」

何とかなだめられたものの、足取りも重く施設に向かう秋子さん。

そんな中、施設に入所しておられる年齢八十五歳くらいの奈津江さんという女性が、秋子さんに声を掛けて下さり、二人はお話するようになりました。じっくりと会話をするのも大切な業務、立派な実習です。秋子さんは、すがるような思いで奈津江さんとの会話を大切にしたの

でした。

こうしてようやく居場所を見つけた秋子さんが、奈津江さんのそばにいると、奈津江さんは俳句が好きだとおっしゃり、次の一句を読まれたのでした。

「若き子と　俳句の話　梅雨晴れ間」

若き子って自分のことだぁ、と、うれしくなった秋子さん。そして彼女はひらめきました。実は、この実習中の課題として介護支援の計画書を作成し、その立てた計画を実施しなければならないことになっていました。この計画書はその人その人にあったリハビリのような計画書です。

奈津江さんは、少し手が不自由で、字を書くことが苦手でした。得意の俳句を、手帳に書き付けておられるのですが、手が震えて、しっかりと書けていません。秋子さんは、そこで思い付いたのです。奈津江さんに好きな俳句作りを通して手のリハビリをして頂こうと。

担当職員のアドバイスも受け、施設の了解のもと、課題のリハビリプランを実施することになりました。「グッパ、グッパ」と手のひらを閉じたり開いたりする手の運動もあります。そして、俳句を作り、紙に書く。手が震えて字を書くことがだんだんと出来づらくなっている奈津江さんだけの特別プランの始まりです。

さて、秋子さんは、もう一つ別の計画を立てました。それは、奈津江さんが作る俳句の一句

一句に、挿絵を添えた俳句集を作り、実習の最終日に差し上げたいというものでした。

ところで、肝心の俳句の方ですが、始めた当初は順調だったものの、奈津江さんもなかなか一句が浮かばなくなってきました。何とか俳句が作れるように秋子さんも祈るような気持ちでサポートするのですが、どうもうまくいきません。

思うように俳句作りも進まないまま、二週間が過ぎたころ、いつものように奈津江さんの部屋へ向かうと、職員と奈津江さんの会話が聞こえてきました。

「実習生の子と、俳句を作っているんですね」と職員が尋ねると、奈津江さんが次のように返事をしたのです。

「あれも、しんどいんよ」

秋子さんは部屋の外で聞いてしまったのでした。

奈津江さんのためのリハビリプランのはずが、つい俳句集のことを意識するあまり、いつの間にか自分のための支援プランのようになり、その焦りからか、かえって奈津江さんに負担が掛かっていたようです。

家に帰り、秋子さんはお母さんに話しました。

「お母さん、今日聞いてしまったの。あれもしんどいって」

そう話すと、秋子さんは、涙が止まらなくなってしまったのです。その様子を見てお母さんは言いました。

「そうだと思うよ。一句考えるって大変なこ

とよ。あなたも一生懸命だけど、その方も一生懸命よ。この前、一緒に教会にお参りした時、先生が、『何事も無理はいけません。我を出さず、神様に任せてみましょう』って、みんなに話しておられたでしょ。実習中に俳句が八つ揃わないのなら、これまでに作られたものもあるだろうから、それらを見せてもらったら」

秋子さんは考えました。

「奈津江さんに無理をさせて、自分のことしか考えてなかったのかも？」

実習課題を意識するあまり、奈津江さんの気持ちを本当に考えられていなかったこと。毎日俳句を作ることが大切なことではなく、奈津江さんが本当に喜べることが必要なんだということなど。そして、奈津江さんとの実習が、お互いにとって本当に良いものとなるよう、神様にお祈りし、お任せしようと決めたのでした。

秋子さんもようやく顔を上げ、前を向くことが出来、相手の気持ちに寄り添った無理のないものとなりました。秋子さんが変わったことで接し方も変わり、いろんな話も出来るようになりました。

こうして、実習の最終日を迎えました。前の晩はほとんど徹夜で、俳句集を作りました。そして世界に一つだけの、とっても素敵な手作りの俳句集が出来上がったのです。それを奈津江さんに渡した時、この心のこもった思い掛けない贈り物をとっても喜んで下さったのでした。

このようにして、秋子さんの三週間の実習は終わりました。

実は俳句集の最後のページに、秋子さんが作った次のような一句が添えられていました。

「梅雨の空　あなたと話し　心晴れ」

「人は恋を失って育つ」

金光教麻布教会　松本信吉

私は都内の金光教の教会で奉仕をさせて頂いている四十六歳。一つ年下の妻と、小学校五年の娘、小学校一年の息子の四人家族である。

先日、近所のおばあさんが、我が家を訪れて、孫からの預かり物を娘に渡して欲しいと言われた。聞けば、私の娘と同級生の男の子のお孫さんがいるそうだ。おばあさんの娘さんが、アメリカ人と結婚して、時々、日本に帰って来ることがあり、その時は、娘と同じ小学校に通うとのこと。

去年、私の娘と同じクラスになったそうで、彼は娘を気に入ってくれたらしく、アメリカ土産のお菓子を渡そうと近くまで来たのだが、恥ずかしくて渡せなかったのだと言う。私は、おばあさんからお菓子を預かり、お孫さんによろしく伝えてほしいとお話した。

そして、「○○くんのおばあさんがお菓子を持って来てくれたよ。○○くんのアメリカのお土産らしいよ」と学校から帰ってきた娘に手渡した。小学校五年の娘は、最初、よくその意味合いが飲み込めなかったようだが、その時、私は自分の若い頃のことを思い出していた。

私は高校一年生の時、岡山県で行われた金光教のキャンプに参加した。もう三十年も前のことだ。全国の高校生が百名近く集まるキャンプである。初めての見ず知らずの高校生同士の集いで緊張したが、最初の自己紹介で何人かの男

女と仲良くなった。

その中に、九州から来た同級生の女の子がいた。テニス部で少し日焼けした肌に、白いセーラー服がよく似合う、眼のパッチリした可愛い子で、方言混じりのゆっくりした口調も、都会育ちの私には魅力的だった。一目ぼれしたが、その思いを伝える勇気もなく、キャンプは終わった。

その次の年の正月、彼女から年賀状が届いた。「私のこと覚えていますか？」と。びっくりした。私の胸は高鳴った。男子校に通っていた私は、うれしくてたまらなかった。すぐに、「今年もまたあのキャンプで会おう」と返事を書いた。夏が待ち遠しかった。

それから、どちらからともなく文通をするようになった。

当時は、携帯電話もインターネットもない。渋谷の大型文具店に封筒と便箋（びんせん）を買いに行って、選ぶのに一時間掛かった。手紙の文章を何度も下書きして、祖父の万年筆で出来るだけ丁寧に清書して送った。

返事が待ち遠しかった。毎日、学校の帰りに郵便受けを確かめた。

ある夕方、可愛い薄ピンク色の封筒が届いていた。ドキドキしながら、封筒を丁寧に開けて読んだ。学校でのテニス部での練習のことや、夏のキャンプを楽しみにしていることが書いてあった。私も近況を書き、部活や好きな音楽の話を書いた。そのうち、好きな曲の歌詞を書いて送り合うようになっていた。

夏が来て、渋谷のカジュアルショップで、はやりのTシャツやキャップを買い、それを着てキャンプに張り切って行ったが、二年生の時も、三年生の時も結局、はっきりと彼女に自分の気持ちを打ち明けることは出来なかった。やがて、互いに高校を卒業し、私は都内の大学に進み、彼女も地元の短大へ通った。彼女は短大を卒業して地元で就職すると手紙に書いてあった。

その時、私はどうしても彼女に自分の気持ちを伝えたいと思い、ハンバーガー屋でアルバイトをして貯めたお金で、飛行機に乗って九州へ行った。そして、空港でレンタカーを借りて、山あいの彼女の家まで行った。

彼女を車に乗せてドライブをし、話をした。「遠距離だけど付き合ってもらえないか？」と。彼女は、「今は好きな人がいるから、ごめんね。でも、気持ちはうれしい」と言ってくれた。

私の五年間のはかない恋は終わりを告げた。大学二年の夏のことだ。

近頃は、ペンフレンドという言葉は死語になり、携帯電話やパソコンを利用して、メールや書き込みをして気持ちを伝え合うのだろう。でも、あのころの手紙を待つドキドキ感や、思いを募らす時間もまた貴重なものだった。今はどんなに距離が離れていようと、デジタルで瞬時に返信される。果たしてどちらがいいのだろうか？

娘の同級生は、アメリカに帰ったという。私は、「ちゃんと手紙でお礼を書きなさいよ」と娘に言った。これから大きくなって何度か娘に

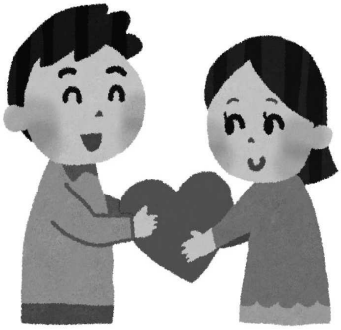
も、こういうことがあるかもしれないが、お礼と自分の気持ちを正直に丁寧に相手に伝えてほしい。

あの時、彼女がちゃんと気持ちを伝えてくれたから、その後、私も素晴らしい妻と巡り会い、一男一女を授かり、今は幸せな家庭を頂いている。

一期一会という言葉があるように、その時々の出会いというものは、二度と巡っては来ない、たった一度きりのものなので、その一瞬を大切にさせてもらいたい。

神様は、必要な時に必要な出会いをさせて下さる。だからこそ、何事も丁寧、正直、親切にさせてもらいたいと思う。例え、ほろ苦い失恋であっても、お互いのその後の人生に必ずプラスになっていくはずである。娘にも神様が差し向けて下さった縁を大切にしてもらいたいと願う。

現代はデジタルの時代と言われているが、娘にも大事な時には、メールではなく、手紙や、直接会って、自分の気持ちを素直に相手に伝えて欲しい。そうした経験が必ず、将来に生きると父は信じている。



「大往生の三原則」

金光教今池教会　浅野　弓

おはようございます。私は愛知県名古屋市にあります金光教今池教会で教会長を務めています。初代教会長は私の父で、父はいつも、「人間は何があるか分からない中を生きているんだよ。だから信心しておかげを受けなければならない」と話していました。その父は十二年前に亡くなりましたが、その時の話を聞いて頂きたいと思います。

十二年前の冬の朝早く、洗面所でバタンという大きな音が聞こえました。びっくりして駆け付けると、そこに父が仰向けに倒れていました。口をぽかんと小さく開けて、うんともすんとも言わずに倒れているのです。その表情は、慌てふためいている私とは裏腹に、のん気そうにも見えました。私は驚いて救急車を呼びました。

運ばれた病院で、父の容態を見たお医者さんは私を呼び、「もう、何も出来ません。覚悟をして下さい」と言われました。昨日まで、一緒に話をし、笑いもし、今朝だって普通に起きてきて顔を洗っていたのに、「覚悟せよ」と言われても、とても、「ハイ、そうですか」とは言えず、出来るだけのことをして下さいと頼み込みました。

先生は、「検査をすること自体が危険ですが、それでもいいですか」と尋ねられ、「お願いします」と、とにかく検査をして頂きました。

検査の結果、心臓の血管が破裂していたそうです。とりあえず血を抜く処置をして頂きましたが、お医者さんからは、「危険な状態に変わりありません、いつでも連絡を取れるようにしておいて下さい」と言われ、私は家に戻りました。

枕元にケータイ電話を置き、このベルが鳴ったら、もうおしまいなんだと思いながら眠れぬ夜を過ごしました。そんな夜が、一晩、二晩と続く中、私は、「人間は何が起こるか分からない中を生きているんだよ。だから信心しておかげを受けなければならない」という父の言葉を思い出していました。

何が起こるか分からないってこのことだったんだ、平穏な日々の中に突然、降り掛かってきた出来事。親の死に出合うという私にとっては初めての大きな出来事。「どうしたら、いいのだろう…どうすればこんな状態を受け止めることが出来るだろうか、いや、いつまで経っても覚悟なんか出来るものか」とも葛藤しながら、この状況の中で信心しておかげを受けるとはどういうことだろうと考えました。

今までに教えてもらったことが次々と頭に浮かびます。

親が死に、子が死に、孫が死ぬはありがたし、と聞いたことがある。親を先に送るのはありがたいことなんじゃないの？　若いころから病弱で何度も大病をした父が子どもを頂き、孫も頂いた、もうそれがおかげなんじゃないの？　世の中にはぽっくり往生を願う人が多いっていう

のだから、それはこういう死に方なんじゃないの？

色々な思いが浮かんでは消え、浮かんでは消え、眠れぬままに私は神様をお祭りしているご神前に行きました。

ご神前の隣には机が置いてあり、父はいつもそこに座って、本を読み、原稿を書いたり、メモを取ったり、誰かが来るとクルリと椅子を回転し、その人の話に耳を傾けて聞いていた場所。気が付くと、私はその机の前に座っていました。

机の上には何冊かの本とノートが並べて立ててありました。わざわざ机の上に並べてある本。それは父にとって特別な本なのだろうか。そう思いながら、ふと目が止まったのは、「死・老人・御霊（みたま）」と背表紙に書かれたノートでした。

「そうか、そうだろうな、父だって自分の死について考えていたはずだよね」。突然、死が近くに舞い降りた今の状況を父だったらどう捉えるのだろうか、その手掛かりがあるように思われました。

そのノートには、いろいろな本や雑誌の中からの記事が抜粋して書き写してありました。「お父さん、いちいち書き写さなくても、今はコピーの時代だよ」とからかうと、「こうして書き写すことで頭に入るんだよ」と答えていた父を思いながら、その中身を読んでいきました。

とりわけ何本も赤い線が引いてあるページが目に止まりました。そこには、

一、生きてきたことに大きな意味があると思え

ること
一、家族や人に愛され、孤独でないこと
一、恨み・つらみがなくて、心の清算が出来ていること

という三つのことが書かれてあり、「大往生の三原則」とまとめてありました。そして、これを目指すことは信心そのものであると、書き添えられていました。

大往生とは、一般には痛みや苦しみがなく、安らかに死ぬこととか、老衰で苦しまずに死ぬこと、というように捉えられていますが、そこに書かれているのは死に方の問題ではなく、生き方の集大成として捉えられた大往生でした。

父は、この大往生の三原則を目指す生き方を信心として捉え、こうした生き方を日々（にちにち）の生活の中に心掛けていたのだと思うと、父の人生は実際にこの三つを満足したものであった、それはありがたいことだったと思えました。

ならば、このように突然、死が父の近くに舞い降りたにしても、父はこうした人生を送らせて頂いたお礼を神様に申し上げているに違いないと思うことが出来、私の中に少しだけ父の死を受け入れる覚悟が出来ました。

そして、私もまた、

一、生きてきたことに大きな意味があると思えること
一、家族や人に愛され、孤独でないこと
一、恨み・つらみがなくて、心の清算が出来て

いること

この三つのことを心して生きていこうと思ったのです。

「落ちても受かっても」

金光教香住教会　荒垣慶子

私は今までたくさん神様にお願いをしてきましたが、いちばん思い出に残っているのは、高校三年生の大学受験の時のことです。

中学生や高校生のころに私が神様にお願いしたことといえば、ほとんどが勉強に関することでした。教会の先生から、「テストの日程が発表されたら、その時間割りを紙に書いて神様にお供えして、元気でテストを受けられるようにとお願いしましょうね」と声を掛けて頂き、また、テスト当日になると、「勉強したことがしっかり答えられ、考え違えのないように、自分の力の足りないところはどうぞ神様気付かせて

下さいとお願いしてから、テストを受けさせてもらいましょう」と教えてもらい、それをテストの度に六年間欠かさずさせてもらいました。テストの日はたいてい緊張しましたが、「神様どうぞ足りないところは足して下さい」とお願いしてからテストを受けると、いつも不思議と心が落ち着いて、頑張ることが出来ました。

高校三年生になると、辺りは大学受験一色で、センター試験を目前に控えた一月にもなると、私の神様へのご祈念にも一段と気合が入ります。私にはどうしても行きたい大学がありました。

「希望大学に合格しますように、どうか合格しますように、どうか合格…」と、まるで呪文のようにぶつぶつと繰り返してご祈念する日々が続きました。母から、「なんかすごいぶつぶつ言ってお願いしてたなあ」と言われるくらい、自分なりに一生懸命神様にお願いしました。そのくらい希望する大学に行きたかったのです。

しかし、センター試験後に学校で自己採点をすると、思ったほど点数は取れていませんでした。自己採点の結果を持って担任の先生と面談をしたのですが、先生は、「うーん」と首をひねって、「この点数じゃ、この大学は受験出来んなあ」「志望校を変えようか」と言われ、「はい」と答えて教室を出ると、さすがに涙がこぼれました。

合格しますようにとお願いしていたのに受験することも出来ない現実に直面して、しばらく呆然としました。しかし、いつまでも泣いてい

られないのが大学受験です。気持ちを切り替えて志望校を選び直すことにしました。

担任の先生が私の受験出来そうな大学を何校か探して下さり、その中から別の大学を選び受験することに決めました。決めたはいいのですが、第一希望の大学しか眼中になかった私は、他の大学の願書を取り寄せていませんでした。願書がなければ受験出来ません。「どうしよう…」と不安になりましたが、たまたま同級生の中に自分は受けないからとその大学の願書を譲ってくれる人がいたおかげで、無事受験出来ることになりました。

たまたま、と言ってしまえばそれまでですが、その時に母が、「神様のおかげだなあ」と言ってくれたので、「これが神様のおかげかあ」と、たまたまではないことを感じさせてもらったのでした。

二次試験の前期日程を受験する時、担任の先生からは、「この大学なら合格間違いなし。まず落ちないだろう」と言われていました。しかし、結果は不合格。「えっ！　どうして？」。どれだけショックを受けるかと思いましたが、でもその時ふと、不合格である現実はとても悲しいけれど、もし前期日程で合格していたら、私はきっと鼻高々になって、不合格になった人の気持ちは分からなかったはず。そう思うと、不合格になったことでその気持ちを知ることが出来たことは、何だか少しありがたいような気がしてきたのです。不合格であることが必ずしも不幸せではないんだ、このことを通して神様

が私を成長させようとして下さっているんだという思いが、心の奥底から湧いてきました。自分でも、どうしてそういう心になれたのか、今でも不思議です。でも、不思議とそういう心になれたということが、教会の先生や親が私以上に私のことを神様に願ってくれていた証のような気がして、支えられていることがありがたく思えたのでした。

二次試験は前期と後期の二回受験することが出来ました。

そういう穏やかな気持ちになれたおかげでしょうか、後期も同じ大学を受験しましたが、今度は見事合格の通知をもらうことが出来ました。私は、神様にお願いした第一志望の大学には行けませんでしたが、全く思いもかけなかった大学に合格し、通学することになりました。

でも、その大学で出会った先生方や友達を通して、今まで自分の知らない世界や考え方に触れる中で、たくさんの発見がありました。なんとも居心地の良い、自分にしっくり合う大学だったのです。神様は本当に私のことを私以上にご存知で、私に一番合う大学へ導いて下さったんだなあ、神様ってすごいなあ、としみじみ思ったのを今でも覚えています。

生きているといろんなことに出合いますが、ついつい結果だけを見て、合格だから良い、不合格だから悪い、というふうに良し悪しを自分で決めてしまいがちです。しかし、そういう良し悪しを超えて、先の先まで見通して神様は私を導いてくれていたんだと、大学受験から十年

以上経った今、実感しています。神様にお願いして導いて頂いた今を私はとても幸せだと感じています。

落ちても受かっても、神様はいつでも私を最善の道に導いて下さる。そのことを忘れずに、さらにここから十年後も今が幸せだと思える自分でありたいと願っています。

がんばれ
受験生！

「心で人を殺さないように」

金光教北九州八幡教会　野中正幸

私たちは、日々、様々な人との関わり合いの中で生かされています。共に声を掛け合い、協力し合い、助け合う一方で、時に衝突したり、怒りを向けたり、ということも多々起こります。

これは私が会社で働いていた時の話です。私は、音楽ＣＤを扱うお店で働いていました。

ある日のこと、一人の従業員が慌てて走り寄り、こう言います。

「お客様がとても怒ってます、対応して下さい」

「ああ、嫌だなあ」と思いながら、行ってみると大変怒った様子で、「注文した商品が今日届くって言われたから、遠い所わざわざ来たのに、商品が無いじゃないか。忙しいのにわざわざここまで来たんだぞ！」と言われます。従業員に詳しく事情を聞くと、「おそらく今日届くと思いますが、確実とは言えないので、届いたら電話でご連絡させてもらいます」とお客様に事前に伝えていたようでしたが、まだ連絡をしていないうちに、お客様が勝手に来られたようでした。

私は、「入荷したらご連絡しますとお伝えしたそうですが」とお客様にお伝えしました。すると、「いや、今日届くと言っただろう。遠い所来たんだぞ、忙しいんだ、どうしてくれるんだ！」と、お客様は怒鳴られます。

とにかくこちらの事情を説明し続けるのです

が、全く聞いてもらえません。お客様の怒りが私にも伝染して、私もイライラ。「そんなこと言ったってしょうがないだろう、分かってくれよ。こっちの方が正論だろう。忙しいんだぞ」と心の中で舌打ちし続けるようなことになってしまいました。しまいには、担当した従業員にも腹が立ってきて、「何でこんな目に遭わないといけないのか、他にもやることはたくさんあるんだぞ」と不満が湧き起こります。

堂々巡りでどうしようもなく、一旦奥へ下がりました。

「神様どうさせてもらえばよいでしょうか」と心の中で祈りながら、高まる気持ちを落ち着かせ、一度状況を整理しようとしました。

忙しい生活の中、わざわざ時間を割いて、遠い所からここまで来店された。お店の事情を説明し、主張し続けるのではなく、お客様の思いに添うようにさせてもらわなくてはならない。こちらは悪くないと、正論を主張するのではなく、まずはお客様の心を受け止めさせて頂くこと。じっくりと理解し、共感することからスタートすることが大切なのではないか。しっかり時間を掛けてお客様の話を聴かせてもらう、その思いを聴かせて頂く、それが大事なのではないか。そもそも、無数に存在するお店の中から、お客様がこのお店を利用して下さっていることにお礼の心を持っていただろうか？　そのように思い直して、イライラを静めてお客様の所へ戻りました。

忙しいところ来て頂いたこと、いつもお店を

利用して頂いていることへのお礼。お客様からご指摘頂いて、ここから業務改善を目指すこと、そのようなことを丁重にお伝えし、改めてお客様のお話を聞かせて頂きました。

非常に時間は掛かりましたが、最終的には、「分かった。しょうがない、気を付けろよ。ちゃんと教育しろよ、また来るからな」と言われ、お帰りになりました。ホッとしました。

後日、無事に商品をお買い上げ頂き、その後もお店を利用し続けて下さいました。来店時には、声を掛けて下さるようにもなりました。心と心がつながった気がし、今となっては大変有り難い出来事です。正論を振りかざすのではなく、相手の心をしっかりと受け止める、こちらのお礼や感謝の心を現すことの大切さに気付かされました。

毎日働いていると、来店される方を一つにまとめてお客様を見てしまいますが、お一人おひとり、様々に違った思い、経験、生きられた環境があります。そういったお一人おひとりとの出会いを頂いているんだということに気付かされ、その出会いを大切にさせて頂きたいと思いました。

それから数年後、私は金光教の教師となり、ただ今は教会で奉仕しております。時折、会社員時代のことを思い出します。どうしても目の前の業務に追われ、効率的に仕事を進めようとするあまり、人を軽く見たり、温かい心、思いやりの心を失い、大切なことが見えなくなったり、不満が高まり、イライラが湧き起こってき

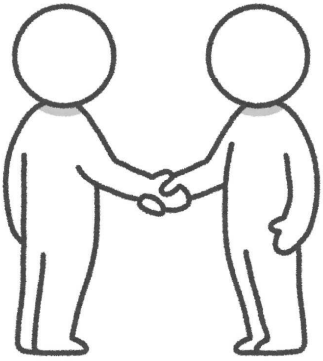
たりということもありました。

そんな時、神様に心を向けて、心落ち着けて、人を祈りながら、もつれやイライラをほどいていくことが大事なことだなあと思います。

金光教の教えに、「人を殺さないといっても、心で人を殺すのが重大な罪である」というものがあります。

心の中で人を殺すということは、目には見えないことですが、その心を神様が見ていらっしゃいます。相手が悪くても、心の中で悪く言うのではなく、「どうぞその方が心を改めて良い方へいきますように、私の心も一緒に良い方へいかせてもらえますように」と、神様にお願いし、行動することを教えられています。

目まぐるしく変化し、忙しい現代。毎日の生活の中で、人を受け止め、共に祈り合う温かい心、神様と人との輪が、大きく広がっていくことを願い、大切にしてまいりたいと思います。



「祈りの中の出来事だった」

金光教羽ノ浦教会　岩崎道範

私は、今、四人の娘を持つ父親として楽しい生活を送っています。

今から六年前、妻が四女を妊娠していることが分かり、風しんの抗体検査を受けました。産婦人科の先生から再感染していることを告げられ、障害のある子どもが生まれるかもしれないと、その時、ある程度は覚悟致しました。とにかく元気で産まれて欲しいと神様に祈る毎日でしたが、検査の結果が出ているだけに無事出産が終わるまでは不安でした。

予定日が過ぎ、大事をとって入院することになりました。陣痛促進剤を打っても産まれてくる気配はなく、ただ待つばかりでした。出産したのが、予定日から一週間後。無事に四女を出産。初めて父親として立ち会い出産を経験し、元気に泣き出す赤ちゃんを確認すると、無事に産まれてきたことを神様に感謝致しました。妻も無事出産が出来、ホッとしておりました。

後は、大きくなっていく中でどんなふうに成長していくのか心配ではありましたが、無事にこの世に産まれてくれた喜びに安心しておりました。夜中の出産のため、上三人のお姉ちゃんたちは、早朝学校に行く前に病院に会いに行きました。小さい妹をそれぞれ順番に抱きながら、良かった良かったと喜んでいました。

学校に行く時間も迫り、いったん病院を後にしました。その帰り、看護師の人に呼び止めら

れて、「お父さん、後で時間作れますか？　先生から赤ちゃんのことで詳しいお話があるそうです」と言われ、子どもたちを学校へ送り出し、急いで先生の話を聞きに行きました。

妻と病室で待っていると、小児科の先生から、赤ちゃんの状態について説明を受けました。「産まれてきた赤ちゃんに心臓の疾患が見つかりました。風しんによる心臓の疾患ではないです。でも心配しないで下さい。この病気は、必ず治る病気です。ただ、ここの病院では治療は出来ませんので、大学病院へ転院して頂きます」との説明を聞きました。

私は、赤ちゃんと共に救急車で大学病院へ転院することになりました。妻は、「良かった、これで助かる」と思っていたようですが、私は救急車の中で、「なぜ、この子にこのようなことが起こるのか？」と、なかなかこの状況を受け入れられませんでした。

何が何やら分からないまま、大学病院に到着しました。すぐ新生児の集中治療室に連れて行かれ、保育器の中で処置が始まりました。その間、担当の小児科の先生、心臓血管外科の先生、麻酔科の先生から治療について説明を受けました。心臓の疾患ということで、まず、手術を行うだけの体力が必要となります。ある程度の成長を待ってということで、二週間後が適当だと言われました。親として、「神様、どうかうちの娘を守り導き下さい」と祈るしかありませんでした。

手術当日、お世話になっている金光教の先生

に、「これから手術に入ります」と連絡すると、「一緒に祈っているから」と言葉を掛けて頂き、その一言で不安な気持ちが和らぎました。

待合室で待っていると、集中治療室の部屋に呼ばれ、担当の先生から、「まだ手術は途中ですが、大事なところは無事終わりました。成功です」とのことでした。このことを教会の先生に報告すると、「良かったのう」と一緒に喜んで下さいました。

手術後、面会が許され、赤ちゃんのそばに行くと、麻酔で眠っている状態でしたが、先生から、「つながった血管に血液が自力できちんと流れた時は、手術に関わる全ての人たちが拍手するほどの出来であった」と言われました。それを聞いて本当にたくさんの方々のお世話になっているんだなぁ、ということを感じました。後は、経過を見守りながら治療を進めていくこととなりました。

二週間で集中治療室から小児病棟へ移り、日常生活に向けてのトレーニングが始まりました。毎日、成長していく一つひとつが親として有り難く思わされました。

たくさんの人に祈ってもらい、たくさんの人に支えてもらいました。風しん感染によって病気に対する覚悟が出来、予定日から一週間遅れたことによって、手術が行える心臓血管外科の先生がヨーロッパ研修から帰国していたこと。出産後すぐに、「この赤ちゃんおかしい」と気付いてくれた看護師長、何人もの赤ちゃんを見てきた人でないと恐らくすぐに対応出来ていな

いと思えるようなこと。また、「心配ありません」と自信を持って言い切って下さった小児科の先生の言葉。二年前から出来た新生児集中治療室のある大学病院。

それ以外にも、「ここしかないタイミング」の中で、それぞれが、順序良く繰り合わせて頂いて、神様と共に歩んでいるとしか思えない働きでした。

六年経った今、妻にあの時、前向きな思いになれたのはどうしてなのか聞いてみると、妻は、「祈りの中の出来事だったからすべてを受け入れることが出来た」と言いました。

私はそれを聞いて、自分たちではどうすることも出来ない状況でも、祈り祈られることによって、心が元気になるような働きが生まれてくるように感じました。神様が様々なことを通して、私たちを安心させようとして下さっているのではないかと思えるのです。

「お母さんが怖い」

金光教入田教会　瀬戸信吉

昨年の八月のことです。猛暑が続いていたある日、三十歳代の優子さんから、「お父さんが亡くなりました。ご葬儀をよろしくお願いします」という電話が掛かってきました。

優子さんが高校生の時、お母さんを病気で亡くしてから、優子さん家族の生活は一変しました。優子さんは、お父さんと中学生の弟と三人で協力しながら家事をこなし、慎ましく生活をしていました。

年月は流れ、優子さんは就職、弟も高校へと進み、無事就職され、家族三人、仕事をしながらの安定した暮らしの中、ご縁を頂かれ、結婚することになりました。その後、弟さんも仕事が忙しくなり、社宅に住み込み、お父さんが一人で暮らしていくことになりました。優子さんも、弟さんも、事あるごとにお父さんの住む家に帰っていました。

更に数年後、優子さんには、おかげで子どもが出来、子どもさんが学校に通い出すと日々の生活が忙しくなり、なかなかお父さんの所へ行けなくなっていたのです。

優子さんの子どもが中学生となった年の平成二十四年。毎年のように、お盆にはお父さんの元に帰ることを楽しみにしていたのですが、お盆直前の猛暑の続く日、突然お父さんが亡くなったのです。

急なことなので気持ちの整理もつかぬまま、

弟さんと相談し、取り急ぎ私のところへ電話を掛けてきたのです。

優子さんと弟さんとの相談の結果、私が奉仕させて頂いている教会で葬儀をすることになりました。慌ただしく私も準備に取り掛かり、何とか葬儀の準備は出来ました。

遺族親族の方々が教会に来られ、決めた時間通りに、優子さんたちと共にご葬儀を仕えさせて頂き、最後に、御霊（みたま）様の立ち行きと、遺族の立ち行きを、ここからお願いしておりますことをお話し、ご葬儀を終えました。

秋のお彼岸前に、お墓に納骨させて頂きました。そのお祭りの後、親族の方々と食事を頂いていた時のことです。

優子さんが私のところに来て、「先生、本日はありがとうございました。無事、仕えさせて頂き、ホッとしています」。その言葉の後、ちょっと時間を置いて、意を決した顔で優子さんは、「ところで先生。私は時折お母さんの夢を見るのですが、その後、必ず、子どもがけがをするのです。先生はどう思われますか？　私はお母さんが怖い。お母さんの夢を見るのが、とても怖いのです」と言ったのです。

その話を聞きながら、私はある信者さんから聞いた御霊様の話を思い出していました。

その信者さんは、こう話してくれました。

「これは、先生からいうと、おじいさん。先々代の教会長先生に、私が、教えてもらったことです。御霊様は、あの世へ行ってからも、子孫のことを見ていて下さるんです。見ると言っ

ても、ただボーっと見ているのではなくて、ちゃんと責任をもって見ていてくれると教えてもらいました」と話してくれたことを思い出していました。

そして、私は、優子さんに話しました。

「優子さん、あなたはお母さんの夢を見るのが怖いと言いましたが、お母さんの夢を見たから、子どもさんがけがをしたのではないですよ。あなたも子どもを授かり、親がどれほど子どものことが可愛いか、よく分かるでしょう。あなたたち姉弟を残して、早くに亡くなられたお母さんは、さぞつらかったでしょうね。亡くなられた後も、御霊様として、あなた方姉弟のこと、お孫さんのことが、可愛くて可愛くてたまらないと思いますよ。その思いのまま、あなたたちをお守り下さっていると思うんです。あなたのお子さんが、けがをする前に、何とかあなたに伝えたくて、夢に出て下さっているとしか思えません。何とか守ろう、伝えようとしているお母さんの御霊様を怖がったのでは、お母さんの御霊様も、せっかく教えてあげようとしているのに、分かってもらえないとつらいでしょう。ですから、今後、お母さんが夢に出てくれたら、怖がるのではなく、まずは御霊様にお礼を言って、いつもよりも増して、しっかり子どもさんを守ってあげて下さいね。すると、今日からは、お父さんと一緒になってあなた方のことを責任をもって守って下さるに違いありませんよ」と言わせて頂きました。

優子さんの顔は、穏やかな顔に変わっていき

ました。そして、「そういうことだったのですか。分かりました。ありがとうございます」と言われ、笑顔を見せてくれました。

金光教の教祖様の教えに、「手厚く信心する者は、夢を見ても、うかつに見るなよ。神は、夢にでも良し悪しを教えてやるぞ」とあります。神様を始め、ご両親、更にはご先祖様までもが、常日頃、私たちのことを願い、責任をもって見ていて下さいます。そして、何か困ったことが起こりそうな時、起こってしまった時、何とかおかげを受け助かって欲しいという思いから、夢にまで出て、教えようとして下さっているということなのです。

常日頃、責任をもって私たちを見守って下さっている神様、御霊様にお礼を申し上げ、更には、神様、御霊様に安心して頂ける、喜ばれる生き方になるよう、焦らず、無理をせず、今あるがままに何事にも実意をもって取り組んでいきたいと思わされております。

《こころの散歩道》

第一回「五十肩になりまして」

いた、いたたたたた。肩が痛い。

それは、今まで経験したことのないような痛みでした。右肩から二の腕の辺りを、突然、激痛が襲ったのです。

床の拭き掃除をしていて、流し台の下に手を伸ばした時でした。無理な姿勢をしたのがいけなかったのだろうか。それで筋を痛めてしまったのかもしれない。いろいろと考えました。まあ、ちょっと静かにしていれば痛みも治まるだろう。その時は、それくらいに思っていました。

ところが、です。二日経っても三日経っても、一週間経っても、なかなか良くなりません。それどころか、痛みがひどくなっているような気がします。ちょっと動かすと痛みが走ります。腕を上げる、ひねる、背中に回す、こんな動作でもしようものなら激痛です。仰向きになっても痛いし、うっかり寝返りも打てません。おかげで睡眠不足。何もしなくても、なんか腕が重たくて、鈍い痛みが続きます。これは、つらい。

その上、右腕が動きにくい、というか、動かせる範囲が狭くなってしまいました。痛みを我慢しても、動かないのです。頭の上に手が届きません。なので、頭を洗う時に不便です。バンザイなどもってのほか。食事の時も不自由です。シャツを着替えるのでも一苦労。

そんなこんなの日常生活の何でもないことが、一つひとつ一大事、そんな毎日が続きまし

た。

それから、ひと月ほど経ちました。いつまでも痛みを訴える私を見るに見かねて、妻が、近所で評判の整体治療院に連れて行ってくれました。

診察台に座らされた私の肩に、ちょっと触れただけで、その整体師の先生いわく、「ああ、これはこれは。立派な五十肩だ。痛み始めて三～四週間というところかな」。

そんなことまで分かるのか。さすがは整体名人、と、ちょっと驚きました。しかし、納得出来ないことが。

「五十肩って、私まだ四十五歳なんですが…」

「三十歳でなっても、七十歳でも、五十肩っていうんです。これはね、人間だったら誰でも、なって不思議はないんです」

ああ、そうですか。しかし、立派な五十肩だなんて…。

「でも、あなた、いい時に来ましたね。今、一番痛い時だから」

え？　一番痛い時が、いい時？

どういうことかと尋ねると、こんなふうに教えてくれました。

「山を登るのでも、てっぺんまで来たら、後は下りるだけでしょう。それと同じで、一番痛い時、痛みのてっぺんを通り過ぎれば、後は良くなっていくんです。けんかでもそうでしょう。カッカカッカ燃えてる時には、周りが何を言っても無駄。下手したら、かえって、とばっちり

を食らうのが落ち。仲裁に入るのなら、収まりかけたころでなくちゃ話にも何にもなりません。肩の痛みも一緒。ここまできたら、後は放って置いても治るんです。でも、痛みのてっぺんまで来た時に、ちょっと後押ししてやると、早く楽になる、そういうわけ」

なるほど。さすがは名人。妙に説得力があります。

そんな話を聞きながら、しばらくもんだり押したり引っ張ったり。治療を受けると、随分楽になりました。

「また、痛みがひどくなったら、いらっしゃい。今度はハリを打ってあげるから」

え？　ハリって痛くないんですか？　出来ればそれはご勘弁。

それからまた、ふた月ほど経ったある日。

「そういえば、最近あんまり痛い痛いって言わないようになったね」と妻が言います。

そう言われてみれば、右肩の痛みが楽になっています。右腕の重さもほとんど感じなくなっています。

そうか。それまでは、「まだ痛い」「まだ動かない」ということばかり思っていたのです。でも、本当は、まだ痛いこともあるけど、まだ動かないところもあるけれど、随分良くなっていたのです。そのことに、「あんまり痛がらなくなったね」という妻の一言で気付きました。

しかし、いつから痛くなくなったのだろう…。覚えていません。というより、少しずつ少しず

つ良くなってきたのでしょう。

そういえば、あの整体師の先生はこんなことも言っていました。「今は楽になっているけれど、本当に良くなるのには、まだ時間が掛かりますよ」。

自然治癒力ということなのでしょうが、こんなふうに痛みが治まってくると、不思議な感じさえします。薬を使ったわけでもないし、手術をしたとかいうことでもありません。それなのに、治っていくのです。人間の体って大したものだと思います。

そう言えば、四十五歳は四捨五入すればもう五十。なるほど、「まさしく五十肩」といっても言い過ぎではないのかもしれません。四十五年の長きにわたり、毎日毎日、腕を上げたり下げたり、押したり引いたり、回したりひねったり。そして、動かしたからといって、痛みを感じることなんてなかったのです。考えてみれば、これもけっこうすごいことなのかもしれない、なんて思ったりします。

いたたたた、で気付かされたことでした。

《こころの散歩道》

第二回「笑うこと」

私は四十代の主婦です。だけど二十二歳になる娘に、こう言われます。「お母さんって、女性…というより…女子やねぇ」。それを聞いた私が、「ありがとう！」と喜ぶと、娘はあきれた顔をして「あの～、全然ホメてないんだけど…。子どもっぽいってこと」と、上から目線です。

私は子どものころからずっと、周囲の友達にも、「あんたは変わってるな～。ボケてるな～」と言われてきました。そう言われても、どこがどう変わってるのか、説明を聞かないと分かりません。なんか、「特殊な人」みたいな言われ方、あんまり好きじゃなかったです。でも、私がしゃべったら、ゲラゲラ笑う人がいます。何がそんなにおかしいんかなと思いながらも、こちらもつられて、アハハと笑ってしまいます。人の笑った顔を見るのは好きですし、私も笑うことで元気が出ます。

去年の春のことです。友達からよく、「あんたはいつも元気そうやね」と言われる私が、すごく落ち込むようなことがありました。「あ～、つらい…」。ションボリと過ごす日々でした。

出掛ける用事がありましたから、その前の日、「さぁ、何を着ていこうか」と、鏡の前に立ちましたが、目が死んでる人みたいでした。その顔を見て、ブサイク過ぎるとゲンナリし、美容

室に行くことにしました。

偶然その日は、いつもとは違う美容師さんに当たりました。私は全然しゃべる気分じゃなかったんですが、鏡に映る美容師さんの顔をチラッと見て、こう思いました。「おしとやかな奇麗な人やな～」。

それが…、彼女が一言二言しゃべったら、イメージとは全然違いました。男っぽく、サバサバした空気が漂いました。そのギャップに思わず、クスッと笑いました。

美容師さんは、私が何も言わないのに、こう言いました。「クヨクヨしてる時間とか、もったいないですよね！」。そして、彼女の日常生活や趣味の話になり、そのうち、付き合っている彼氏の話まで出てきました。

美容師さんは、クールに、こう言われます。「頼ることはしたくないし、頼られるのも嫌いなんです！　これって可哀想ですよね」と明るく話されるのにつられて、私はこう聞きました。

「可哀想って、彼氏さんのことですか？」

「そうですよ～。私、甘えたり甘えられたりとか、したくないって感じなんです。お客さんの話も聞かせて下さいよ。どっちのタイプですか？　甘えたい方？　甘えられたい方？」と、サラッと言われますので、モジモジしていますと、美容師さんは、ニコニコして、こう言われました。「フフッ。真面目に答えなくてもいいんですよ～。こういうのは適当でいいんです、適当で」。気付けば私は、おなかを抱えて笑ってました。美容師さんは不思議そうに言いまし

た。「そんなにおかしいかな～？　笑って頂いてありがとうございます」。

私は、帰り際、彼女に言いました。「お礼を言うのはこちらの方です。あ～楽しかった。なんか男の方と話してるみたいでしたよ」。そして美容師さんからはこう言われました。「女子っぽいお客さんで、笑わしがいがありました」。

鏡に映る、私の死んでいたような目が、少し輝いて見えました。

笑うことって、すごいかも…。

私に元気をくれる人がいます。それは、寝たきりの母の存在です。母は、十年前に、くも膜下出血で倒れましたが、長い間熱が続き、目も開けられず、意識のハッキリしない状態が、およそ二年続きました。治る見込みのない母に、「リハビリをしても意味がないんじゃない？」という人もいましたが、私は絶対に諦めたくありませんでした！

こう思っていました。「いつ目が開くか分からないけど、母の意識が戻った時に、体が硬くなっていたら可哀想だから、指と足をほぐしといてあげたい」。

そして眠り続ける母に声を掛けたり、好きだった音楽を聴かせてあげました。家族も親戚も私を応援してくれて、頑張ることが出来ました。三年後には、自分の手で食事が取れるようになり、言語リハビリを頑張ったおかげで、段々と声も出てきました。その後は車椅子を自分の手で自由に動かし、ポータブルトイレに移れるま

でになりました。介護サービスを受けながら、穏やかな在宅生活を七年間送っていました。

ところが、今年の二月に突然、命をつかさどる、脳幹につながる血管が切れて、現在は寝たきりとなりました。

私は力が抜けフラフラでしたが、このごろ、母が、私の顔をジッと見て笑ってくれるようになりました。もうしゃべれないんですが、私に向かって、元気を出してと懸命にメッセージを送ってくれてるように感じます。色々なことにも負けないでねと…。そんな母が今では私の心の支えになっています。

うれしいこと、悲しいこと、誰にだってあると思います。でも、生活の中に小さな喜びを見付けて、そして、笑うことで、幸せを感じていきたいですね。

《こころの散歩道》

第三回「ミツバチさん」

数年前のこと、岡山市内で珍しい落とし物が見つかった。それは、「グリーンイグアナ」という爬虫類。

「イグアナをペットにするなんて、どんな男だろう」などと勝手な想像をしていたら、後で落とし主が二十代の女性だと分かって驚いた。「蓼食う虫も好き好き」なのは分かっていたが、イグアナをペットにするとは、う～ん。

常日頃からそんな考え方をしているものだから、いざ自分がミツバチなどというものを飼い始めても、最初のころは世間に向けて、あまり大きな声でそれを言い出せなかった。

「趣味でハチを飼っているって？　あの怖いハチ？　うそお、変わってるね」とまでは言われないにしても、やはり反応はあまり良くない。

「違う、違う、ミツバチ。それもニホンミツバチといって、昔から野生に住んでる、大きさは一センチちょっとほどの小さいヤツ。柔和でおとなしく、人を攻撃してくることなんてないよ」などといくら説明してみても、言い訳ぐらいにしか聞こえないのだろう、誰も納得などしてくれない。

「でもそれって、刺すんでしょう？」。そう聞かれたら、私にはもう返す言葉がない。そう、私も立派に「変わった人」にされてしまった。

「飼う」と言っても、やることは至って簡単。春先、ニホンミツバチが好みそうな所に、三十

センチ角ほどの木箱に小さな入り口を開けて置いておく。後はひたすら、巣別れを待つのみ。巣別れとは、女王蜂が新しい女王に巣を明け渡して半分ほどの群を連れて出て行くことで、その群が箱の中に入ってくれるのを待つ。もし入っても、鍵を掛けるわけでもなければ餌をやるわけでもない。

そんなので「ミツバチを飼っている」というのも変な気もするのだが、とにかく私の場合、運良く一つの群れが箱に入ってくれて、めでたく飼い主になれたのだ。

全国的にミツバチ不足が深刻化して、イチゴ、メロンをはじめ、多くの農作物の不作が心配されている。かのアインシュタインは、「ミツバチがいなかったら、人類は四年しか生存出来ない」と言ったとか。

花は種を残すために蜜を出してミツバチを呼び、ミツバチはその蜜を食糧として子孫を残す。花とミツバチは、どちらか一方でも欠けたらお互いが生きていくことの出来ない関係にある。

そしてその恩恵を、私たちはいろんな農作物やハチミツ、といった形でこうむっているということなのだが、それほど人類にとってミツバチは大切な存在なのに、やはり蜂は蜂、ごく一部の人を除いて、「ハチ」と名が付くだけでやはり嫌われるのだ。思わぬ所に巣でも作られた日には、すぐに、「駆除」というのが現実だ。

ミツバチを飼育していると、時々その駆除を

頼まれることがある。駆除というと、一般的には殺してしまうのだろうが、私のように趣味で飼っている人たちの駆除とは保護すること、殺すようなことは決してしない。箱に入れて持ち帰る。すなわち保護することが目的だ。

いつか飼育仲間からこんな話を聞いたことがある。

ある町の役場から駆除の依頼を受けてボランティアで出掛けていったはいいが、いざ行ってみると最近のミツバチ不足を引き合いに出して、「まさかタダでミツバチを持って帰る気ではないでしょう？」。そんな意味のことを言われたというのだ。もちろん冗談半分だろうが。

私も何度か保護のための駆除に出掛けたことがあるが、駆除の現実はそれほど甘くはない。いつもはおとなしいニホンミツバチでも、いったん自分たちの大切な住み家に手を掛けられたとなると話は別。必死の抵抗を試みてくるから、こちらもお岩さんのようにされるのを覚悟でやらなければならないのだ。

そんなことを言われた友人は、「それでしたらどうぞ、自分たちで駆除して下さい」。そう言って現場を後にしたというのだが、その話を聞いて、私はなんだか悲しくなってしまった。

越冬期を除いて、ニホンミツバチの寿命はたったの一カ月ほどだ。その間、ハチさんたちは、巣の掃除、育児、そして蜜集めなど、自分に与えられた役割にほん走する。そんな蜂たちを見ていると、なぜか、その一匹一匹が愛おしくて、

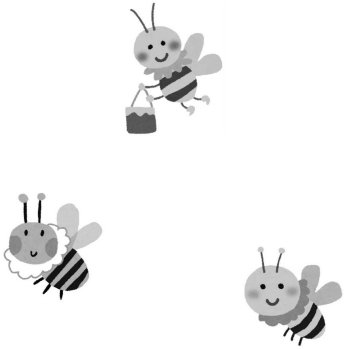
心が癒されるのだ。

ニホンミツバチを飼うようになったきっかけは、先に飼育を始めていた友人のこの一言。

「ハチさんたちのために巣箱というお家を提供する。その代わり、その家賃として蜜を少し頂く。どう、楽でいいでしょう」。

実は少しだけ損得勘定で始めたミツバチの飼育なのだが、後になってあることに気付いて、少し反省している。

それは、えらそうにミツバチからは家賃と称してハチミツを頂いているくせに、五十年以上もこの天地に住まわせて頂いている私はというと、その天地に対して、少しの家賃もお支払いしていなかったのだ。



《こころの散歩道》

第四回「銀座のお漬け物」

三月末、娘が東京の大学に入学が決まり、バタバタと引っ越していきました。

二年前、息子を京都の大学に送り出しているので、勝手は分かっているつもりでしたが、末っ子で、しかも女の子で、いろいろと心配の種が増えていきます。

ちゃんと起きたかしら？　戸締まりは？　電車を間違えなかったかしら？　いつ、娘から連絡がくるかもしれないと携帯電話が気になって、つい目がいってしまいます。

そう思っている矢先に、着信音。

「もしもし、お母さん。私は、朝の満員電車をなめていたよ」という娘からの電話です。一時限目に間に合うように乗る中央線の混み方は、地方で育ち、どこへでも自転車で行く暮らしをしていた者には、全く経験したことがない強烈な都会の先制パンチだったようです。

「大丈夫？」。東京で暮らしたことのない私も想像を巡らすことしか出来ずにいます。

「大丈夫。何とかひるまず突っ込んでいって乗れたから。それから、今日はお弁当も作ったし」

私の心配とはうらはらに、張り切っている娘の声が響きます。

「へえ～、起きるのがやっとかと思ったら結構やるじゃん」と安心したのと同時に、子どもの手が離れたことを改めて実感しました。

それまでの夕食の時間は、賑やかに食卓の隣同士で、「おばあちゃん、私のところに漬け物置かないでよ」と漬け物の苦手な娘が言えば、「こんなおいしいものが食べられないなんて、可哀想な子だねえ」とおばあちゃんが応える、お決まりの漬け物バトルがあったり。反対に娘の好きなおかずの時は、本当においしそうに頬張り、音を立てておかずが減っていくのでしたが、家に残ったおじいちゃん、おばあちゃんと私たち夫婦では、いつまでも昨日のおかずが残ったままで、静かな静かな食事の時間が過ぎていきます。

「火の消えたっていうのはこういうことをいうんだね」と、夜、夫に話しながら、「私がこんなこと言うなんてね」と苦笑するのでした。娘が生まれたころから、夫の仕事が忙しくなり、長期出張も多く、当時私は、家事と子育てと仕事と、非常に忙しい日々を送っていました。とにかくやることがいっぱいで、いつ寝たのか、いつ食べたのか記憶にないほどでした。そんな風に追いまくられていた時、自分のことだけに時間を使える日が早く来て欲しいと、その時を待ち望んでいたはずなのに、いざその日が来てみたらこんなにメソメソしちゃって、全く情けない私です。

「私もそれは経験済み」。慰めてもらおうと友達に話すと、ぴしりと言われました。

「うちなんかさ、大学入学で家を出てから、東京で就職して、社内恋愛をして、結婚して。

十八歳の時からそのまま東京に行きっぱなし。寂しいもんよ。でもね、その娘の結婚式の時、いろいろな人のスピーチを聞いて、仕事の上でも上司から信頼され、友達もたくさんいて、海外からこの日のためにわざわざ駆けつけてくれた子もいてね。なんか私の知らないうちに、こんなに成長していたんだなと思ってね、ジーンとしちゃった。もちろん寂しさはあるけど、親元離れて良かったと思ったんだよ」と話してくれました。

考えてみれば大学に入れたのは本人の頑張りが一番ですが、健康面でも、経済面でも問題がなく恵まれてのことだし、それに加えて親元離れるだけの環境があるのは、決して当たり前ではない、感謝してもしきれないことなんだと改めて思い直しました。娘にはこの恵まれた中での大学四年間を、いろいろな人に出会い、良き経験をたくさんしてもらいたい、そう思えるようになりました。

それから二カ月。娘からの電話が日に何度も掛かってきていたのが、五回になり、三回になり、「あれ、今日は掛かってこなかったな」なんて思うようになったある日。娘から段ボール箱が一つ届きました。使わない物が入っているのかと思っていましたが、開けてみると、「父の日」を兼ねて家族それぞれに宛てたプレゼントが入っていました。

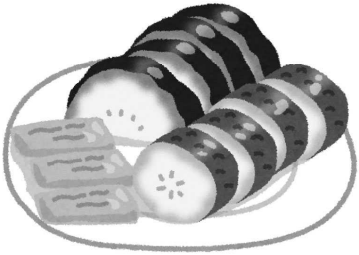
夫にはピンクのYシャツ、お散歩に行くおじいちゃんには熱中症にならないようにと帽子、

私にはエプロン。そしてなんとおばあちゃんには、なぜか銀座で買ったお漬け物。いつもおばあちゃんと漬け物バトルをしていた子が、漬け物を買いに行ったなんて…。おばあちゃんはもったいない、もったいないと涙ぐんでいました。

子どもが生まれてから、夜、何度も起こされながら授乳をし、おしめを替え、添い寝をしていた子が、やがて一人で寝られるようになり、そのうち自分の部屋で寝るようになり、そして一人暮らしをするために巣立って行きました。

「これで親の役目は終わりかと思ったけど、そうじゃないんだね」と夫に話すと、「親って言う字は木の上に立って見るって書くだろ。木の上からは遠くて直接手は出せないけれど、反対によく見えてくるものもあるからな」という返事。

そうなんです。いよいよ見守り祈るという大切な役目が残っているのだと思いを新たにいたしました。



金光教本部　ラジオ放送係

住 所　〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷３２０

電 話　０８６５-４２-６４５３

FAX　０８６５-４２-２１１４

メール　w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

北海道放送	土曜日 あさ5時10分	中国放送	土曜日 あさ5時50分
東北放送	日曜日 あさ5時00分	南海放送	日曜日 あさ6時00分
ニッポン放送	日曜日 あさ4時30分	RKB毎日放送	日曜日 あさ6時50分
東海ラジオ放送	金曜日 あさ5時25分	宮崎放送	日曜日 あさ7時10分
和歌山放送	日曜日 あさ6時50分		
朝日放送	水曜日 あさ4時50分		
山陽放送	日曜日 あさ6時35分		

こころで聴くおはなし　検索